

俳句

おおなかしょうせい

大中祥生

周南市

(1923～1985)



【著作】

句集『群猿』（昭和47・鳳鳴出版社）
句集『花候』（昭和52・昭和出版）
句集『根白草』（昭和58・昭和出版）ほか

【関連情報】

草炎全国俳句大会
大中祥生創刊の『草炎』の俳句大会は昭和47年に第一回を開催して以来、昭和60年の祥生急逝後も、その文学理念を継承して、今日まで継続実施しており、40回を数える。

青年時代に結核にかかって以来、病気がちで、常に薬を手放すことはなかった。その祥生のいのちを支えたものは「俳句」といってもよい。

昭和三十年代には、それまでの写実的な伝統俳句に対抗するかたちで、前衛俳句の作家が台頭。林田紀音夫、赤尾兜子らとともに大中青塔子（祥生）もその一人であった。心の疼き、肉の痛みを真正面から訴え続けた第二句集『領海』は、「語彙の数々には、悪の詞華集さながらの観を呈して痛快」と、伊丹三樹彦の序文が示しているように、意匠を様々なかたちに纏ったその措辞に、強烈な個性の開陳をみせる。そこには負のイメージを超越して、生きることへの巨視的な強い対置の感覚が存在する。それは現代人として問題意識に挑戦することに、俳句作家としての使命を自覚していたからでもあろう。

一方、評論にも活躍した。『現代俳句の共感』などに収載された、祥生の切れ味鋭いその筆は、「大中祥生の文章は、やわらかく、旨味があって読みやすい。中国地方の一角に蟠踞してよく俳句の流れを視ているのである」（金子兜太）
「著者の文章には恰幅のよい風格がある。闊達で完結で落ち着いていて機鋒は鋭い。一般が見落としてきづかない重大な問題を根気よく的確に捉えている。」（石原八束）
などと、高く評価された。

祥生の作風も、六十年代終わり頃から、所謂伝統回帰への、詩的精神風土の現出を見る。「庶民の哀歓を現代の批評精神でとらえ、抒情詩として定着さす」をテーゼに、落ち着いて俳句を書き、また地方組織の設立、運営にも多大な手腕を発揮した。

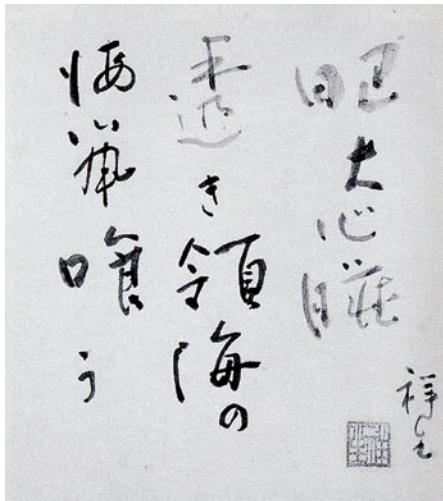
骨折れの傘かたく巻き牡丹園
薪積んで焚口潤む冬の窯

方法意識のすぐれた変革者であった祥生は、荒々しい風土を求めて旅をしたが、本州の西端のこの山口に身を置き、詩的営為を地方から発信しつづけた土着の作家であった。

(文・久行保徳)



佳境の椅子揺する鬼二つ秋まつり (周南市湯野) 祥生



直筆色紙

無名の鶉育て悲鳴の日本海
冬の蜂ころび無傷な空のこす
淡紅の蓮咲きむごい時間かな
葉桜が緻密死にゆく鯛のいろ
馬の目が濡れて駆出る雛まつり

大中祥生 年譜

(提供・久行保徳)

大正12（一九二二）年	
昭和15（一九四〇）年	一七歳
昭和16（一九四一）年	一八歳
昭和19（一九四四）年	二二歳
昭和20（一九四五）年	二三歳
昭和21（一九四六）年	二四歳
昭和22（一九四七）年	二五歳
昭和23（一九四八）年	二六歳
昭和24（一九四九）年	二七歳
昭和25（一九五〇）年	二八歳
昭和26（一九五一）年	二九歳
昭和29（一九五四）年	三二歳
昭和33（一九五八）年	三六歳

1月1日、山口県玖珂郡川越村（現・岩国市周東町川越）に、父大中豊、母スメの長男として生まれる。
徳山商業学校を卒業し、山口百十銀行（現山口銀行）に入行。この年、『若葉』後に『天の川』に投句。
向学の意志強く、福知山高等商業学校に入学するも、病に倒れ翌年退学。療養の傍ら「あらくさ吟社」を創立し、会報『あらくさ』を発行。
俳誌『草の塔』創刊。
吉田芳子と結婚。
有馬草々子、岡崎白外郎、磯部九六らと同人誌『銀漢』を創刊。
俳句総合雑誌『内海俳句』を創刊。
光市島田で書店「三島書房」を開業。弘中康熙らと「創作研究会」を主宰し、志摩亘の筆名で一時期創作に没頭する。肺結核で柳井周東病院入院。
「あらくさ吟社」を「草炎俳句会」と改称し、『草炎』を創刊。以後、昭和44年まで休刊、復刊を繰り返す。
周東病院入院。周東病院句会発足。
句集『暖丘』出版。『作家』へ同人参加。前後して、『海流』『俳句文学』『新暦』『海程』等に参加。
『青玄』に同人参加。後に無鑑査同人。
「山口県俳句作家協会」を西尾桃支、高橋飄々子、山崎青鐘らと結成。山口県俳句年鑑（第一号）編集刊行。

昭和34（一九五九年）	三六歳
昭和39（一九六四年）	四一歳
昭和44（一九六九年）	四六歳
昭和46（一九七二年）	四八歳
昭和47（一九七三年）	四九歳
昭和48（一九七三年）	五〇歳
昭和49（一九七四年）	五一歳
昭和51（一九七六年）	五三歳
昭和53（一九七八年）	五五歳
昭和56（一九八二年）	五八歳
昭和57（一九八三年）	五九歳
昭和59（一九八四年）	六一歳
昭和60（一九八五年）	六二歳

現代俳句協会会員。「青玄」評論賞受賞。
現代俳句協会幹事。『毎日新聞』山口県版俳壇選者。（昭和48年まで）
休刊していた『草炎』を久行保徳らと復刊。以後、現在に至る。俳号を「青塔子」改め、本名の「祥生」に。徳山市芳堂文学賞受賞。句集『領海』出版。第一回防長俳句大会を開催。（昭和59年まで）
山口県芸術文化振興奨励賞受賞。有馬草々子句集『草の中』編集出版。肝疾患のため徳山周南病院入院。
句集『群猿』出版。山口県俳句作家協会副会長に就任。第一回「草炎全国俳句大会」を開催。草炎の「作品第一主義」を提唱。
『朝日新聞』防長俳壇選者。（昭和60年まで）
徳山市湯野（現・周南市）「ホテル紫水園」前庭に第一句碑建立。阿武郡福栄村（現・萩市）「羽賀台」に第二句碑建立。評論集『現代俳句の共感』出版。
急性肺炎にて入院。翌年、句集『花候』を出版。
日本ペンクラブ会員。山口県芸術文化功労賞受賞。
評論集『現代俳句の眺め』出版。徳山市文化功労賞受賞。
「現代俳句協会中国地区連絡協議会」設立、初代会長に就任。
句集『根白草』出版。
6、7月不眠症のため入院を繰り返す。8月、甲状腺機能低下のため、神戸海岸病院入院。9月岡山大学附属病院入院。11月9日退院直前、クモ膜下出血により倒れ、11月11日永眠。11月13日徳山市（現・周南市）徳応寺にて葬儀、告別式。法名「大音院釋勝解得生居士」

【関連情報】
大中祥生文学碑案内・・・下松市に2基（笠戸島・笠戸島ハイッ前庭、米川・米泉湖文学碑
プロムナード）
佳境祭・・・大中祥生の第一句碑建立（昭和49年2月11日）を記念して、草炎人が湯野温泉「紫水園」に集い、句碑の墨直しや祥生を偲び、懇親を深めている。
毎年2月11日に行っていたが、数年前より3月の第一日曜日に実施している。